

山行報告

2月19日～20日

マレーシア キナバル山

藤村 敏幸

山名	キナバル山	山行名	キナバル山登山と観光旅行
ルート	Timpohon Gate(登山口)→Laban Rata Rest →Summit→Laban Rata Rest→登山口		
山行日	令和2年2月19日～2月20日	天候	19日 霧後雨、20日晴れ
参加者	CL 藤村 SL 西川 平尾 倉光 和田		

	コースタイム					
	地名	標高	時:分	地名	標高	時:分
	Timpohon Gate	1,866	9:55 発	Laban Rata Rest	3,272	2:30 発
	0.5km	1,935	10:07 着	Lows Peak	4,095	6:45 着
	1.0Km	2,039	10:32 着	8.0Km	3,929	7:40 着
	2.0Km	2,252	11:20 着	Laban Rata Rest	3,272	10:10 着
	3.0Km	2,455	12:12 着			11:00 発
	4.5Km	2,898	13:41 着	Timpohon Gate	1,866	16:40 着
	5.0Km	3,001	15:23 着			
	Laban Rata Rest	3,272	17:00 着			

キナバル山について事前にネットで調査すると、総じて苦勞することなく登れたとか、初心者でもなんとか登れたとかの報告が多く、又当会の経験者に聞くと厳しい山行との言葉もなく、容易に登れる山であるような印象を受けていた。入山料金5万円を徴収するだけに、登山道はよく整備され、要所には、休憩場所・トイレが設置され、更に危険箇所は鉄製の階段が設けられていた。頂上付近には、ロープが張られ滑りやすい所は手で持つようになっていた。山小屋も綺麗で、食事はバイキングで朝食にはフレンチトーストがでるほどメニューも豊富であった。寝室は2段ベットで温かく、日本の山小屋と異なり一人ひとりのスペースは十分確保されていた。ただトイレは床と便座が濡れており不便であった。ガイドが引率しており道迷いになることもなく、安心して登山ができる環境であった。ただ2日目の歩行時間は非常に長く日本では考えられない行程であった。事前に旅行社から予定表を受取り、長いことは分かっていたが、この行程でも大多数の人が登れるから設定されていると甘く誤解して、参加者に強い体力を要求されるコースであることを知らせなかったことが、悔やまれます。19日はゆっくりと休憩しながら登りあまり疲労感もなくラバンラタ小屋に到着できた。20日は午前2時30分に出発して午前6時45分にSummitに到着した。頂上で写真撮影をして下山するとき既に4時間以上歩き、前日の睡眠不足もあり全員疲れがたまり、段々と足取りも重くなりラバンラタ小屋まで戻れるのか心配になり何回もガイドに休みを要求した。ガイドは10時までに到着しようと焦っていた。10時より5分遅れ小屋に到着し遅い朝食をとった。11時にラバンラタ小屋をcheckoutして下山する時、もう少し休憩するよう申し出する。疲れが出る前に下山した方がよいとのガイドの忠告により休みなしで出発したが、日本であればもう1時間休憩したと思う。ガイドが私の不満を察知して私を先頭にしたので、できるだけ休みをとりゆっくりと下山した。休憩ごとにガイドの顔をみると彼は少しいライラしていた。登山口まで戻れるか心配したが、全員驚くほどの底力を発揮して、朝から延べ13時間20分歩き通し登山口に到着した。さすが田辺山友会会員と感心した。偶然にも2020年2月20日に頂上を踏み又素晴らしい天候に恵まれ、苦勞した甲斐がありました。

ヒヤリハット 無し

今回は初めての海外山行&旅行企画(2月15日~22日)で、航空券や宿泊所の手配等、日本と異なり戸惑うことが多く時間を要したが、色々と勉強になり、有意義な旅行でした。AirAsia はWeb でしかコンタクトをとれず、初めてチャットをした。Booking.com で安い宿泊施設を捜し、一人平均約2,500円(素泊まり)で宿泊できた。

ただ現地ではなかなかオーナーと連絡できずイライラした。18日のコタ・キナバルでは、事前に到着時間をBooking.com を通じて連絡していたにも拘わらず、当日電話すると留守番電話で、連絡できず宿泊できなかった。後でスマホを見るとオーナーからマンションの1階のメールボックスに鍵を入れて置くとのメールが届いていた。コタ・キナバル空港到着時には、Wi-fi が繋がらずメール連絡を知ることはなかった。幸いマンションの入口に、自分の客に鍵を渡すために来ていた中国人女性に会い、彼女の知り合いの宿に泊めてもらった。20、21日も彼女の世話で宿を斡旋して頂いた。20日に再度当初予約先に電話すると繋がり、文句を言い予約をキャンセルした。相手も自分の失敗を認め、後日3日分全額宿泊費を返金してくれた。初日の16日にはヒンズー教の聖地であるバトゥ洞窟を訪れ、異様な音楽の流れるインド人の露店街を通り抜け、巨大な神の像と極彩色の階段を見て驚いた。17日には、国立博物館で83歳の不思議な日本人に合った。彼は定年後、東南アジアを旅行しており地元恵那市下河合で仙人茶屋を営んでいると話していた。19日のキナバル山登山時に休憩すると、珍しい日本人に現地の方が話し掛けてきた。Summit を登頂した下山者とすれ違いざまに、「よかったですか」等声掛をすると相手も嬉しそうに返答をして一時の会話を楽しんだ。西川さんが現地語で話すと、相手は驚いていたが皆さんニコニコして返答し、楽しそうであった。20日のキナバル山頂上は、見渡す限り岩に覆われ、空は真っ青、眼下には雲海があり、日本では見ることがない雄大な景色に一同感動した。21日は、西川さんの図らいで一般旅行者は渡ることができない海上集落を、現地人専用の高速モーターボートに乗り激しく揺られ、訪問して現地の人々の生活を見ることができた。毎日色々な驚きや感動がある deep な旅で、全員怪我もなく又コロナウイルスにも感染することなく、無事閑空に到着したときは安堵しました。2週間たち覚えている言葉は、残念ながら^{トゥリマ カシ}Terima Kasih (ありがとう) だけでした。



初の海外登山 キナバル山（4,095m）に登って

平尾繁和

キナバル山は、山腹に熱帯雨林、山頂部は1千万年前に溶岩が固まってできた花崗岩の岩峰を有する東南アジアの最高峰。6000種以上の植物と100種以上の哺乳類が確認されているという自然豊かな山に魅力を感じ動植物との出会いも期待して参加した。山頂まで約2,300mの標高差を2日かけて登る。初日は、国立公園管理事務所で手続き、身体面のチェックを書面で提出、登山IDタグをもらい車で登山口のティンポホンゲートへ。地元ドゥスン族のガイドのレイナスさんから英語でルートの説明を聞く。初日は山小屋まで6.0km標高差約1,400m（コースタイム6時間）を登る。「スロー・スローで」とリーダーが最初をお願いをする。熱帯雨林のなかをすすむと0.5kmごとに標識（標高が記載）があり登山道はよく整備されている。途中7ヶ所休憩舎がありトイレもある。休憩舎毎に5分程の休憩をはさむ。見慣れぬ花が目を引く。真紅のシャクナゲやレイナスさんがホワイトカラーと教えてくれた樹木の小さな白い花が目についた。レイナスさんによると、この山で花が一番多いのは10・11月だそうだ。ウツボカズラのある所へ案内してもらいカメラにおさめる。熱帯雨林特有のミストがかかり樹林が幻想的に浮かび上がる。4つ目の休憩舎では近くまでリスが寄ってきた。昼食をとっていると雨が降り出したので雨具をつけて出発。思ったより蒸し暑くなかった。17時ラパンラタ小屋につく。夕食を済ませベランダから見た雲上の夕景が実に素晴らしかった。19時に床に就くもなかなか眠れない。2日目、1時30分起床、準備をして食堂で軽朝食をとりコーヒも飲む。2時30分満天の星のもとヘッドランプをつけスタートする。木の階段を繰り返し上ったあと、岩場に張られた太いロープをつかみ斜面を一步一步登っていく。はるか眼下に

は麓の街の灯り、行く手には点々とヘッドランプの灯、その上に北斗七星が大きく輝き、振り返ると南十字星も見えた。



ミストなか樹林をひたすら登る



ラパンラタ小屋に到着



山小屋のベランダで



ラパンラタ小屋からの夕景

6 時前には右手岩峰の裾が赤らみ、下界は雲海に覆われている。この上ない雄大な景色に見とれしみじみと喜びがこみあげてくる。やがて明るくなり周りが見えだすと岩峰が聳えその中に 1 枚岩の広大な斜面が広がっている。これまでの登山で見たことのない不思議な光景に感動した。水分補給を十分しゆっくりペースで登ったためか、去年の 0 合目からの富士登山に比べ息が乱れることもなく何の問題もなく登頂できた。頂上は狭く写真を撮り直ぐ下山。途中 2015 年の地震の爪痕の巨大な白い岩が落ちていた。10 時過ぎに小屋に戻り朝食をとり、1,400m の長い下りをみなさんと頑張っ下り 17 時前にゲートに戻り無事山行をおえた。途中各国からの登山者と挨拶を交わしあう楽しい登山だった。8 日間の旅は、相次ぐハプニングや思わぬ出会いなど濃厚な思い出を残してくれました。企画していただいた藤村さんはじめ同行のみなさん本当にありがとうございました。



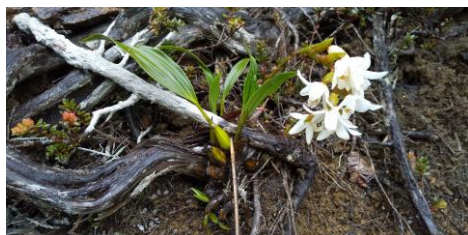
1 枚岩を登る



シャクナゲのなかま



最初の休憩舎の傍に咲いていた花



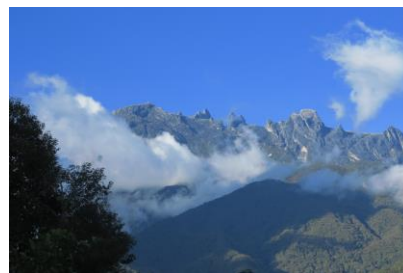
ランのなかま



ウツボカズラのなかま



無事下山



国立公園管理事務所前からのキナバル山

キナバル山登頂 と マレーシアのんびり観光

倉光 展子

70をとっくに過ぎた私は、これまで漫然と日々を過ごしてきたが、近頃折に触れ「タイムリミット」を意識させられる。生来の好奇心に「二度と来ないチャンス」への欲が加わり、何かと背をつつかれている。今回のキナバル山登山もこんな経過のもとに実現した。

キナバル山は、これまで山の仲間も何人か登っていて、その写真を見たが、黒っぽい土肌の裸の山のように見えて、そんなに魅力を感じていなかった。しかし世界遺産と騒がれ、4095mの標高は、3776mの富士山を凌いでいる。何か面白い体験ができるだろうと期待がふくらんだ。

せっかく遠くへ行くのだからと、キナバル山登山の他に、首都のクアラルンプールとボルネオ島の都市クタキナバルの観光が加わり、7泊8日の旅となった。一行は男性3人、女性2人の5人。皆個性的な面白い人たちで、あちこちよく歩き、共鳴しあい、アクシデントにも味付けされて、“ディーブ”で楽しい旅になった。

2日目、まずマレー半島にある、マレーシアの首都クアラルンプールに降り立ち、二日間街を楽しんだ。摩天楼が林立する、超近代的な街だった。個性的なデザインの建物、直線と曲線の大胆な重なり、あちこちに見られる斬新な遊びの造形美は、私たちの感嘆とカメラの対象になった。さすが、他のアジアの国々と比べ、近代化が進み、豊かな国ときいていただけのことはある。ただ、建物の中へ入ってみると、ここも例のごとく、世界のファッションブランドの店、コンビニ等が目につき、中身が薄く、世界の大資本の侵入(?)を感じた。



4日目、いよいよキナバル山登山である。楽しかったクアラルンプール観光の余韻と寝不足の負荷をもって、ボルネオ島へと飛んだ。いつもなら登山の前に感じるストイックな緊張感がない。もう一つ私の気持ちを軽くすることがあった。「キナバル山は東南アジアの最高峰ではあるが、よく整備されていて、そんなに難しい山ではない」という情報である。事実だが、都合よく受け取りがちな私は、これも気持ちを緩める一因にしてしまった。こんな安易な思いが、今回の登山を思いの外しんどいものにしたのかもしれない。



入山許可書を首に下げ、ガイドさんにリードされてゲートを10時半通過した。年中30度前後の熱帯雨林のボルネオの山の麓は、ジャングルと想像していた私の目には、一見、日本の山と取り立てて変わらない。出発ゲートが1866m、頂上が4095m、その間2129mを一步、一步足を踏みしめて登っていけばいいのだ、と活を入れる。



マレーシア ボルネオ キナバル山（頂上の台地） ？に敗れた 女が一人

今日は登山者がいつもより多いとか。揃いのTシャツを着ているグループがいる。Tシャツには「20200220」とあった。2の記念日なのだ。昼食の休憩所までは日本の高山登山と変わりはない。私自身も変わりない。「さあ、これからだ。睡眠がとれなかった分、しっかり食べてがんばろう。」しかし、この「しっかり」がいけなかった。高度はどんどん上がる。胃はむかつく。頭痛や胸の痛みはないので、高山病の心配はなさそうだ。この程度でどうしてしんどいの、と煩悶しながら、やっと5時に今夜の宿（標高3272m）に着いた。設備がよく、感じがいい山小屋だった。すっきり晴れ渡って、目の前に重厚な岩山のキナバル山が迫っている。夕日を浴びて、その大きさ、荒々しさが強調され、どうあがいても、納得がいく形でカメラに収めきれなかった。ほとんど眠れないまま、翌朝2時半山小屋を出発する。早い出発は頂上でご来光を見るためだとか。急峻な岩の上に階段が延々とついている。鎖もつけてある。暗闇の中、ヘッドランプを付けて、どんどんと登っていく。

途中前方を見晴らすかすと、真っ暗な中に小さな蛍のような点々の長い線が一本、天に向かってゆっくり動いている。光の列は「魂」の昇天のようだった。稜線を登っていく人々のヘッドランプの不思議な光景だ。しばらく心を奪われていたが、後



ろから、星空がきれい、北斗七星だ、南十字星が見える、と声がする。日本語の声に我に帰って、まだあんな高さまで登らなければならないのか、とがっくり来た。キナバル山の上に出た。広い台地の岩盤は、日の出直後の光を浴びて、焦げ茶色に美しく光っていた。その上に変化に富んだ岩峰が点在している。「神様の芸術」だ。クアラルンプールのビル群は、これに比べたら、小細工にすぎない。

Nさん こんな真剣な顔もされるんですね

キナバル山の頂上と言われている岩峰の一つに、岩山が好きな私は、ポイポイと飛びながら登っていった。ついに頂上に立てた。ガイドさんが私を見ていた。にっこりと強面の顔がほころんでいた。「お前は怠けていたな」と見透かされているようでもあった。

頂上でもう少しゆっくりしたかったが、「高山病がひどくなる。早く下りるように」と言われ、そそくさと下りる。すごいところへ来たものだ。頂上に立てたのだ、と満足しながら、疲れた体を励まし、いい仲間と幸運に恵まれた幸せを噛みしめながら下山の途に就いた。

7日目登山も終わって、のんびりとボルネオ島のコタキナバルの街を散策した。さわやかな気候（30℃であっても）の海辺の美しい街を、丘に上がったり、市場をのぞいたり、土産物を買ったり、地元の人と話したりして楽しんだ。海をボーと見ていると向かいの島の前の浅瀬にたくさんの家らしきものが横長に建っているのが目についた。マレーシア通のNさんによると、いわゆる舟屋の貧しい集落だとか。その集落へ向かって高速で、しぶきをあげて飛ぶように走っている小さいボートが気になった。私はつい「あんなボートに乗りたいね」と口走ってしまった。それを聞きつけたNさんの迅速で巧みな交渉によってすぐに希望は実現した。悲鳴を上げながら、期待以上のスリルを堪能した。対岸の集落は、思った以上の数の家が並んでいた。海の中に突き刺してある家々の支柱は細いもので、これで、よく家の安全が保たれているものだと驚いた。ボートから降りて、家々をつないでいる木道を歩いたが、あちこち板が朽ち、穴もあいていて緊張した。隣接している島には学校、教会はじめ公の建物が建っていたが、水際はごみや廃棄物のたまり場になっていた。子供や女の人は明るく、写真の許可を求めると、髪をなおしたり、家族で並んで、気軽に応じてくれた。人嫌いになりきっていない、さわやかな顔を見て、少しほっとした。マレーシアは貧困率が低いとはいえ、やはりここも貧富の差は大きい。



暖かく、旺盛にリードしてくださったFさん、マレー語が得意で、通訳、交渉等、忙しく動き回ってくださったNさん、お世話になったHさん、Wさん、楽しい旅をありがとうございました。